

はじめに

ことばの意味の研究とは何か

ことばの仕組みを理解するのは人類の悲願だ、といってもそれほど大ききではないかもしれない。ことばを使うという特徴が、人間を他の動物からはっきりと区別してきた。ことばを一切必要としない人間の活動がどれほどあるだろうか。歌・政治・戦争、何を挙げてもことばが介入してくる。ことばが全てではないが、ことばの存在感を否定する人はいないだろう。そもそも、こうやって筆者の考えを読者に届けることができるのも、ことばのおかげである。

自然と、古代より、何千、何万（何百万、何千万だろうか）という研究者たちがことばに興味を抱き、その働きを調べてきた。おかげで、われわれはずいぶん遠くまできたといえる。20世紀以降における、哲学者と言語学者によることばの意味の研究、という本書が取り扱う分野——ことば研究のごく限られた一面——だけを取り出してみても、われわれは多くの発展と展開を経験してきた。

哲学者と言語学者が行ってきた、ことば・言語の意味の研究において、重要な目標の一つは、ことばの創造性を解明することである。ことばは創造的で自由なものだ。どれだけ退屈で代わり映えないある日の夕方ですら、あなたが電車で立ち聞きした会話は、人類がこれまでに発したことのない新しいことばだろう。

…みんなの前で言われるんだけど。足を組んでるでしょ、すると足を組みなさんな、って彼女に怒られて。背骨が曲がるとか将来身体に悪いとか言われるんだけど、わざわざみんなの前で言わなくてもいいんだよね

...

このようななんてことのない会話を、「人類史上初」などと大仰に述べても許されるのは、これと、一言一句全く同じ発話がおそらく存在しなかったからである。もちろん、この会話に含まれている一つひとつのことは新しくもなんともない。しかし、それらのパーツを、このように組み合わせたことは初めてなのだ。

「ことばを紡ぐ」などとよく言われるが、研究者はしばしばことばをレゴブロック（ダイヤブロックでもよい！）に例える。ことばは「組み合わせられる」のである。ことばは同じ要素・ブロックを繰り返し使うが、それらの組み合わせ方は自由で際限のないものであり、常に新しいことばが生まれている。詩人・歌人・小説家などは、われわれと同じブロックを使いながら、思いもがけない形・規模で組み合わせを行い、新しい作品を生み出す。彼女らが行っているのは、創造的で自由な活動であり、言語はそれを行うに最適なメディアなのだ。

では、ことばの創造性を解明するための一つのステップは、基本となることば・ブロックの性質を調べることで、そしてそれらの組み合わせ方について調べることになる。これが、おおよそ、「意味論」と呼ばれる分野で、哲学者と言語学者が行ってきたことである。言い換えると、文全体の意味を、文の部分がどのように決めるのか調べるのが意味論である。

文の部分が少し違うだけで、文全体の意味は大きく変化する。例えば、本書では取り扱わないが、日本語の有名な文のペアに次のようなものがある。

- (1) a. 瑞樹は右耳だけを動かせる。
- b. 瑞樹は右耳だけが動かせる。

(1a) ということは、瑞樹という人は、左耳や顔などを動かさずに、右耳だけどうにか意図的に動かすことができるのだろう。一方、(1b) は、たった一文字——ましてやどうでもよさそうに思える「が」と「を」——しか変わらないが、述べられていることが全く異なっている。(1b) なら、瑞樹は、麻痺しているのだろうか、左耳やあるいは身体の他の部分を動かすことができず、右耳しか動かすことができない、ということ伝えている。なぜ一文字異なるだけ

で、これ程までに文全体の意味が変化するのだろうか。「が」と「を」は一体何が違うのだろうか、そして、それらは文の他の部分とどのように関わり合うのだろうか*。意味論では、このような問いを、日本語や英語など、多様な言語全体に適用し、答えていく。言語全体について、ことばの一つひとつがどのように組み合わせられ多彩な内容が表現されるのか説明することは、人間の創造性解明につながるのである。さらには、こうした意味論分野が広く工学的に應用されており、またこれからも應用されていくことはほとんど自明だろう。例えば、研究が進めば、たどたどしく定型の発話を返すプログラムでなく、本当に創造的な対話を行う機械が生まれるだろう。

本書のトピック

さて、本書のトピックは、タイトルにあるように「山田」や *Louis* といった名前である。名前は文を構成するブロックであり、名前が文全体の意味にどう貢献するのかを明らかにするのが、本書の目標である。名前というのは最も身近なことばの一つだ。誰もが、赤ん坊のときから繰り返し自分の名前で呼びかけられ、生涯を通じて何度も何度も「わたしは...です」と声に出し、「氏名...」と紙に書き、タイプしてきただろう。また、どの話者も、自分の名前だけでなく、家族・友人の名前、地名・企業名など、膨大な数の名前を知っている。意味の研究はことばの研究であり、名前は身近なことばなのだから、もちろんこれまでも名前の意味研究は数多く存在してきた。特に、言語を主題とする哲学分野「言語哲学」において、名前の意味研究は盛んに行われてきた。しかし、名前に関するこれまでの言語哲学的研究には、大きな落とし穴があった。

序論において詳しく紹介するが、現在数多くの哲学文献によって支持されている主流の立場は「ミル説」と呼ばれる。ミル説によると、名前は一つのものにしかなってしまらない特殊な言語表現であり、他の名詞と根本的に異なる表現とされる。例えば、「エリザベス」という名前と「女王」という普通名詞は、

* これの元となる事例の議論と、言語学者による最近の理解の一つとして (Takahashi, 2010) が挙げられる。

犬と猫，りんごとオレンジ程度は異なっているとみなされている。本書はこの立場を間違っていると主張する。ただ，ミル説がこれ程受け入れられているのは，20世紀言語哲学が主に英語圏において発展させられてきたという事情を考えると，致し方ないのかもしれない。次の二つの英文を比べてみると，ミル説の魅力が少し伝わるかもしれない。

- (2) a. Elizabeth arrived.
b. The queen arrived.

文中の *Elizabeth* は名前であり，*queen* は普通名詞である。読者はもちろんご存知だろうが，英語において，通常，名前は *the* といった冠詞を伴って現れない。一方，*queen* といった普通名詞は冠詞などとともに現れなければならない。一見するところ，名前と普通名詞は文の中での働きが異なるのである。働きが全く同じならば，同じように使われていただろう。よって，(2a-b) を眺めていると，名前 *Elizabeth* は普通名詞 *queen* と違う種類の表現なのだ，という発想が生じてもおかしくない。

しかし，もし英語以外の言語を起点とすれば，この発想に対する疑問が生じてくる。例えば日本語から始めてみよう。

- (3) a. エリザベスが到着した。
b. 女王が到着した。

(3a-b) においては，「エリザベス」も「女王」も，特に冠詞などによって導入されるわけではない。一見するところ，名前と普通名詞を根本的に異なる種類の表現とする理由はないように思われる。「エリザベス」も「女王」も，それぞれ多くの人に当てはまるだろうが，この場合，(3a) は誰か特定のエリザベスという人物について語っているのだろうし，(3b) はどこかの特定の女王について語っているのだろう。日本語から出発すると，名前だけを特別視しようとする発想は，極めて不自然なのである。

これまでの言語哲学研究の落とし穴は，あまりに英語を軸として議論が進められてきた点にある。「名前は特異な表現だ」という考えは，英語から出発すると「自然な」発想であり，広く擁護されてきたが，日本語という別の視点

から捉え直すと、とても「不自然な」ものであることが明らかとなる。もちろん、「不自然な」あるいは「へんてこな」発想が結局正しかった、という帰結は探究活動においてしばしば生じる。しかし、いずれにせよ、複数の視点・言語から問いを検討し、「あれは自然だ」、「これが自然だ」といった思い込みを排除すべきなのである。

本書では、日本語・英語双方の名前の精査を通じて、総合的に、「名前は他の名詞と本質的に同じ種類の表現だ」という考えを擁護していく。名詞は複数のもの・対象に当てはまる述語であるので、この立場は、名前を述語とみなす「述語説」と呼ぶことができる。したがって、本書が目指す到達点は、述語説を展開し、擁護するところにある。

本書の位置付け

本書の主題とそこで語られる内容の実質は、以上のように特徴付けられる。また具体的な研究史、他の文献との一致・不一致などは、以下の本文によって明らかにされる。ここでは、本文では語られない、もっと制度的・歴史的な本書の位置付けを、個人的体験も含めてざっくりと述べてみよう。

本書は一般に、「言語哲学」と呼ばれる哲学分野における研究書である。言語哲学は、文字通り、言語を研究対象とした哲学探究のことであり、フレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインといった人物が切り拓いていったとされる。本邦でも、そうした人物の主張や功績などをまとめた書籍は数多く存在し、およそ20世紀終わりに至るまでの主要な展開を追うことができる。では、21世紀において、言語哲学者は何をしているのだろうか。現在、言語哲学者たちが何に関心を持って、どんな手法で研究を進めているのか、具体的なイメージを持っている読者はそう多くないかもしれない。本書では、近年の固有名および名詞表現に関する主張が検討されるとともに、生成文法の道具立て、意味論と語用論の関係性、可能世界意味論の拡張としての状況意味論などが導入される。本書は、現在における言語哲学の関心・手法の一端を具体的に紹介するといえる。

同時に、本書は「形式意味論」と呼ばれる言語学分野における試論でもあ

る。これは、筆者が二つの学問を融合させた・つなぎあわせた、などというわけではなく、そもそも、言語哲学と言語学における意味論はお互い分かちがたく発展してきた。フレーゲ、ラッセルら創始者たちが欧州で始めた研究が、海を越えて北米に渡り、哲学と言語学は紆余曲折を経ながら影響を与え合ってきた。本書は、哲学・言語学者による学際的交流の、21世紀における断片であるともいえよう*。「哲学者と言語学者と一緒に研究するとはどういうこと？」という疑問に、本書が一つの答えを与えていると期待したい。

筆者が本書のもととなる博士論文を書いた、アメリカにあるメリーランド大学は、哲学科と言語学科が隣同士の建物に入っている。朝はプラトンの『国家』や分子生物学における説明概念について議論し、昼は隣の扉をくぐり抜け、チョムスキーの『統辞構造論』や数概念の発達について議論する、といった毎日を送らせてもらった。筆者を指導した博士論文審査委員の内訳を述べると、哲学科・言語学科兼任教員が二人、哲学科教員が二人、言語学科教員が二人、というものである。すぐに付け加えたいが、欧米でもこのような幸運は稀だっただろう。言語学者に混じって研究を進めていった自然な結果として、複数言語への執着がある。言語学科の大学院生の多くはフィールドワークを自ら行い、何らかの「得意」言語を自分の研究で取り扱っていた。哲学科の学生として、さすがにフィールドワークは行わなかったが、日本語話者の反応を簡単に観察できるという事実（自省！）を利用しない手はなかった。英語以外を研究対象とした言語哲学の文献は、英語で書かれたものであっても、未だ非常に数が少ないように思われる。言語哲学の問題に対して、日本語を通じた取り扱いを提案するというのは、本書の大きな特徴である。

これ以上の自分語りは蛇足に過ぎない。さっそく本論に入ろう。

* 言語学・哲学交流の紆余曲折については、言語学者バーバラ・バルティーが回顧的論文を多数執筆しており、興味深い。